厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）
医療機関における国等が開発した医療安全にかかる情報の活用推進に向けた研究

分担研究報告書
医療安全情報の活用実態と今後の効果的な発信に向けた探索的検討ーアンケート自由記述およびフォーカスグループインタビューの統合的分析ー

研究分担者　山口　悦子　国際医療福祉大学
医学部
教授

研究要旨

【目的】本分担研究では、日本医療機能評価機構等が提供する情報の、医療機関での活用実態の活用の現状と課題、今後の活用に向けた具体的なアイデアを探索した。

【方法】全国の病院を対象としたウェブアンケート調査における自由記述の分析と、医療安全管理者へのフォーカスグループインタビューを実施し、収集したデータに対して個人情報を完全に排除した上でテーマ分析を行った。

【結果・考察】アンケートの分析結果からは、自施設に合う事例や組織文化に関わる情報が求められ、裁判事例等を利用してスタッフの危機感を喚起する意図が確認された。一方で、医師への周知の困難さや職種間の温度差が課題であった。小規模病院は業務負担を軽減する目的で転送するだけで済むパッケージ化や動画・SNS の活用が求められていた。中・大規模病院では、提供情報は経営層からの予算獲得やルール徹底のための政治的道具として利用される半面、ペーパーロスや形式主義の蔓延が深刻な課題であり、部門への丸投げを防ぐ宛先設計の見直しが指摘された。以上の分析結果を統合すると、施設規模によって情報の使われ方は異なるが、最適化されたプッシュ型のデジタル配信を求める点は共通しており、情報そのものの拡充よりも、業務負担が少なく、職員に情報を浸透させる伝達手法の提供が重要であることがわかった。

【結論】外部機関が提供する情報と現場の現実にはギャップが存在する。今後は従来の一律的かつプル型の提供から、施設規模や職種に応じた情報のパッケージ化、低負荷で拡散可能なデジタル媒体の導入、組織全体や経営陣を巻き込む伝達経路の再設計が求められている。

A．研究目的

（背景）医療安全に資する様々なエビデンス・対策等が発信されつつあるが、それらが医療現場で実装されるまでには様々な課題があり、実装研究の推進はグローバルにも提案されている(2023 年、閣僚級世界患者安全サミット)。

本邦においては、日本医療安全調査機構や日本医療機能評価機構が、事故等の未然防止・再発防止に資する情報(以下「外部情報」)を医療機関等に向けて提供しているが、医療機関におけるこれらの外部情報の活用状況や、外部情報の活用の事故防止等の医療安全の向上への寄与の程度については十分に把握されていない。そして、医療機関における外部情報の活用・医療安全向上のために、医療機関側に求められる体制・活動等や、外部情報提供側に加えるべき工夫は明らかになっていない。

また、医療法に基づき都道府県等に設置されている医療安全支援センターでは、医療機関に対して医療安全の確保に必要な情報提供や研修を行っているが、その内容は十

分把握されておらず、医療機関側の需要に合致しているか明らかになっていない。

（本分担研究の目的）全国の病院を対象としたウェブアンケート調査における自由記述の分析と、病院の医療安全管理者を対象に実施した構造化面接の結果の分析を行い、これら二つの結果を統合することによって、病院における外部の医療安全情報の活用の現状、活用するにあたっての現場の課題、および今後の活用のための具体的なアイデアを探索する。

B．研究方法

（1）データの収集

①全国の病院に対するウェブアンケート調査：回答のうち、自由記述の設問である「貴院の従業者に対し、医療安全に関して特にどのような情報の周知が必要と感じていますか」に対する回答を対象とした。

②フォーカスグループインタビュー：400 床未満の小規模病院 2 施設、および 400 床以上の中・大規模病院 3 施設の医療安全管理者を対象に実施。実施時間は 1 時間程度とし、外部情報の活用の状況、活用する際の利点や課題、今後の活用のアイデアについて参加者に自由に話し合ってもらった。

（2）分析方法

収集したアンケートの自由記述、およびインタビューの書き起こしテキストデータに対し、個人情報や施設名を完全に排除した上でテーマ分析を実施した。

（倫理面への配慮）

研究の実施にあたっては研究代表者および分担者が研究の趣旨を説明し、分析方法と結果の提示の仕方に関して個人情報や施設名は削除されることを明示し、参加者に同意を得て実施した。

C．研究結果

（1）アンケートの自由記述の分析結果

全国の病院からのアンケート自由記述回答から抽出されたテーマとコードの一覧を表 1 に示す。

（2）フォーカスグループインタビューの結果

1）小規模病院グループ

小規模病院グループにおけるテーマとコードの一覧を表 2 に示す。

2）中・大規模病院グループ

中・大規模病院グループにおけるテーマとコードの一覧を表 3 に示す。

D．考察

（1）アンケートの自由記述の分析

アンケート結果からは、現場が求める情報に自施設の特殊性に合致した事例や近隣の事故事例など身近な脅威が含まれると同時に、心理的安全性の構築やハラスメント対策など組織文化の根本に関わる領域への関心が高いことが明らかになった。また、裁判事例や逮捕事例といった社会的・法的影響に関する情報を積極的に活用して、現場スタッフに危機感を持たせ、医療安全を自分事として捉えさせる意図が観察された。

しかしながら、周知における構造的な課題として医師への周知の困難さや職種間の温度差が挙げられており、現場の医療安全管理担当者が、情報の単純なばらまきではなく、特定の職種へのターゲティングや伝達経路の抜本的な見直しが不可欠であると考えていたことがわかる。

（2）フォーカスグループインタビューの分析

①　小規模病院グループのテーマ

小規模病院においては、人的・時間的リソースの枯渇と情報の不適合が大きな障壁と

なっている。専従者が不在であったり、多忙な業務の合間に情報を収集して加工する余裕がないことが挙げられ、大病院向けに作成された高度な情報は現場のニーズと乖離していると感じていた。

業務上の負荷を解決するため、管理者は転送するだけで済むような低負荷なパッケージ化や、動画・SNS を活用した視覚的な周知手法への転換を求めていた。さらに、保健所の立ち入り検査や地域ネットワークとの連携といった外部からの刺激が、活動を維持する強力な駆動力として機能していることがわかった。

② 中・大規模病院グループのテーマ

中・大規模病院においては、外部情報のうち改善策として提示されている内容については当たり前と評価されることが多い半面、国や公的機関が発出したという権威を利用することで、経営層から予算を獲得したり現場にルールを守らせたりするための政治的な道具として活用していた。

大量の冊子が送付されることによるペーパーロスの発生や、周知したという事実だけが記録され内容の深い理解が伴わない形式主義の蔓延が深刻な組織的課題も指摘していた。今後は、紙媒体の有効活用とデジタル媒体の有効な併用が必要である。また、医療安全管理部門への業務の丸投げ、すなわち安全担当以外の部門や役職者の無関心を防ぐために、宛先設計の見直しも必要と考えられる。

③ 小規模病院グループと中大規模病院グループの意見の比較

施設規模によって、外部情報の価値と使われ方が大きく異なることが確認された。小規模病院が外部情報を教育的ツールとして捉えているのに対し、中・大規模病院は組織全体を統制し経営層を動かすための権威的エビデンスとして捉えていた。一方で共通する課題は情報収集の負担であり、双方が自ら探しに行き読み解くという多大な手間を省くため、最適化されたプッシュ型のデジタル配信や情報へのアクセシビリティ向上を強く求めていた。

③　総合討論

全国アンケートと施設規模別のインタビューから得られた課題を統合すると、外部機関が提供する情報は、現場が抱えるリソース不足や職種間の意識の壁との間に生じる理想と現実に対してギャップが存在することがわかった。現場の管理者が必要としていることの一つは、専門情報そのものの拡充よりも、その情報をいかにして低負荷かつ効果的に組織へ浸透させるかという伝達手法の提供である。若い世代に訴求できるよう直感的に理解できる動画や SNS 等のデジタルフォーマットへの移行、業務負担を減らせるよう即座に転送可能なパッケージ化、管理者や経営陣の意識変革を促せるようトップダウンでの責任の明確化、そして現場の危機感を喚起する法的・社会的事例の提示など、施設の規模や個別の課題に応じて選択できる柔軟な発信システムの構築が求められている。

Ｅ．結論

本分担研究は、アンケートの自由記述およびフォーカスグループインタビューの統合的分析を通じて、医療機関における医療安全情報の活用の現状と課題を明らかにした。現場の医療安全管理者は、業務負担、職種間の温度差、蔓延する形式主義といった壁に直面しながらも、情報を独自に加工し、あるいは政治的に利用することで組織の安全確保に尽力している。今後の医療安全情報の発信においては、従来の一律的かつプル型の提供方法から、対象施設の規模や職種に

応じた情報のパッケージ化、低負荷で拡散可能なデジタル媒体の導入、および組織トップを巻き込む伝達経路の再設計への転換が求められている。

Ｆ．研究発表

1.　論文発表

2.　学会発表

Ｇ．知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

表 1：アンケート自由記述のテーマとコード一覧

テーマ	コード	具体的な発言（引用・要約）
1. 実践的・具体的リスクの共有	他施設・近隣の事故事例	「他施設の事故、地域の事故など身近で同じ立場の人と情報交換したい」、「軽微なインシデントが重大な事故に繋がることを意識するため、他院の事例を知りたい」
	臨床特定分野の安全対策	「薬剤の誤投与、アレルギー情報の登録」、「精神科に特化した事故事例（自殺、離院、行動制限など）」、「急性期ではないので介護関係（経管栄養、身体抑制等）の情報」
2. 組織文化と心理的側面の醸成	心理的安全性と報告文化	「個人を責めない報告文化」、「心理的安全性、職種間のコミュニケーション」、「報告が安全向上に貢献したかを見える化するフィードバック」
	「自分事」化への意識改革	「対岸の火事ではないことを認識し、自己のこととして意識を持ってほしい」、「ベテランほど経験値に頼り、科学的根拠（エビデンス）を求めようとしない」
3. ルール遵守とシステム構築	標準手順（SOP）の徹底	「マニュアル・業務手順の遵守」、「ルールを守ることが患者も職員も守ることにつながる」、「5S（整理・整頓・清潔・清掃・指導）の基本」
	システムによる事故防止	「人によらない対策、システム上での事故防止」、「システム対応の落とし穴について」
4. 社会的・法的影響の周知	裁判事例・法的責任	「危機管理意識を高めるための裁判事例」、「事故により負う責任について」、「報道される逮捕事例などの重大事案」
5. 周知における構造的課題	職種間の意識の温度差	「医療側と事務側の温度差がある」、「医師（Dr）が依然としてまったく周知できない。関連学会等で周知してほしい」、「医療安全部門への丸投げ」
	伝達媒体とリソースの限界	「電子媒体は見に行かなければならないため、紙媒体が有効」、「研修の時間確保が難しい」、「動画などのわかりやすい発信」

表２：小規模病院グループにおけるテーマとコードの一覧

テーマ	コード	具体的な発言（引用・要約）
1. リソースの枯渇と情報の不適合	専従者の不在・兼務の限界	「いかんせん小さい病院は安全管理部門がないんです。…業務の中での安全担当なので、思うように情報収集したり動くことができない、片手間になっちゃう」
	情報内容と現場ニーズの乖離	「（提言書は）今の病院にはマッチしないんです。…大学病院の急性期病院と今の病院（51 床）っていうのは…全然小さくて。…隅に追いやられているのが現状です」
	プル型（能動的取得）の壁	「今は皆さんが自分で情報を取りに行かないといけないらしくて、それって意外とひと手間かかるんですよね」
2. 低負荷な周知とデジタル媒体の活用	「3 秒周知」へのニーズ	「案内文まで全部書いてくれて、転送するだけでいいぐらいにしてくれたらありがたい。…3 秒でやるにはどうしたらいいかなっていう一つのアイディアなんですけど」
	視覚・SNS 媒体の有効性	「（今の若い人）文字読まない…ですね。…動画だと、周りのみんなも見やすいみたいで、わかりやすい。…インスタだったら…量が多くても指でパパっと見て見やすい」
	現場での教育的側面からの加工	「資料の掲示をすると同時に、テストをしたりする時もあります。…これに対する意見をもらうような話し合い（10 分ほど）は設けています」
3. 外部刺激と地域連携による意識の維持	行政・立ち入り検査の効果	「…アクションをかけていただけることが、担当している者としてはすごく刺激になって、やらなくちゃとか…感じました」
	地域連携によるモチベーション向上	「こういうネットワークがあると、本当にまずリーダーである私が周知して、それをみんなに広めていくというのが仕事の一つだなと思っています」
	組織全体（事務職）の巻き込み	「事務とかが協力し合ってやらなければダメ。…事務職が医療安全に関して無頓着（なのが課題）。…事務方も含めて病院としてどう考えなきゃいけないのか」

表３：中・大規模病院グループにおけるテーマとコードの一覧

テーマ	コード	具体的な発言（引用・要約）
1.「印籠」としての政治的活用	権威を利用した対策の推進	「一番役に立ったのはやっぱり印籠…『こんなん言うてきたやん（外部情報）』って言って。…『これで次うちやったら完全過失で補償やで』って言ったら上（経営層）動きますもんね」
	「当たり前」という低評価	「はっきり言って…解決策…当たり前のことしか書いてないなということで、それが参考になるってことはなかった」
	組織的な強制力への転用	「議事録が残りますから、例えば同じようなインシデントが起こったときに、『このときに通知したでしょ。なんで書いてないんですか』という、割と強制力はあった」
2. 媒体のミスマッチと「ペーパーロス」の防止	紙媒体の無駄と破棄	「（PDF もあるから不要分は）捨ててたんですよ。…フードレスならぬペーパーロスが起こる」
	プッシュ型デジタル化への期待	「メールで定期的に…ニュースレターみたいな感じで…リンクをクリックしたら、当月の医療安全情報のサイトに直で飛んで自由に取れるっていう方が便利」
	施設規模に応じた選択制	「施設の状況に合わせて媒体を変えられるっていうのが一番大事かな。…メール会員とか印刷要望みたいな…」
3. 形式的周知と「確認」の限界	閲覧確認と理解度の乖離	「Web アンケートフォームを使って…『見ましたよ』という確認のボタンを押す。…閲覧ボタンを押したからといって中身読んでるかどうか…は別の話」
	宛先問題（院長か担当部署か）	「宛先を管理者（院長）にするのは大事…医療安全担当部門を作って、丸投げてそこにさせとけみたいな風潮を払拭するため」
	「ジンクス」としての事象発生	「お知らせが来たら数ヶ月以内に同じことが起こるっていう（ジンクス）。…うちの事例がどこから漏れたかと思うほど似ている（事例が、結局、起こる」